

---

# 嫌いなタベモノ

石鍋 盆回し

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嫌いなタベモノ

### 【著者名】

Z5385B

### 【作者名】

石鍋 盤回し

### 【あらすじ】

僕はトマトが大嫌い。ママもパパも、好き嫌いするなって口をつぱくしてる。でも、僕はトマトが大嫌い。だから、僕は神様にお願いしたんだ。『トマトなんか、この世から無くして下さい』ってね。

早く、来ないかな。

彩華ちゃん。

僕は、横にある食べかけの真っ赤で綺麗なトマトを手に、口の辺りにあわせたり、手にあわせたりしながら待つてゐるんだ。

「マ…おかあさん、何で僕のお目に乗つてるトマト多いの…？」

台所にあわよくまみ食いをしようとして侵入した僕は、僕専用の淡い青色のお目に乗つてるプチトマトをキッと睨みつけながら、マニア猛然と声を上げた。

「ん~、さうど残つてたのが七個でね。やっぱり盛りの隼ちかんたん一個あつたのよ。」

ママは台所の付近で手拭いてから、料理の仕上げにかかるつていてこいつのことを見もしない。

僕は怒つてゐるんだ。ママ、僕がトマトを嫌いなこと知つてゐるべせんわー個増やしてある。

「マ、おかあさん、あこつてるの…？」

僕のことをみて笑ひすぎて顔を真っ赤にしたみたいなプチトマトのトマト

ヤツ。

絶対にご飯が終わつてもう使わなくなつた箸で穴だらけにしてやる。

そりやあもう穴あきチーズみたいに。

「聞いてるわよ。もう、隼ちゃんのトマト嫌いは食べず嫌いなんだから一回食べてみればいいのよ。」

やつぱつママは振り向きもしないで料理の盛り付けをはじめた。

「それにきっと、彩華ちゃんも好き嫌いしない男の子を好きだと思うな、ママ。」

「 ッ…チ…！」

彩華ちゃん。

かわいくて、きれいで、びじんで、あたまがよくて、かわいくて、おしゃれな、ホントに食べちゃいたいくらい僕が大好きな沖浦彩華ちゃん。僕は一番つかれたくない左側の弱点を攻撃された空飛ぶ白い木馬みたいに、一気に台阶から逃げ出した。

やつぱり、僕のハンバーグの横にはプチトマトが乗つかつたままでてきた。

僕はもう断然見ないフリ。

ハンバーグはもちろん、横にあるニンジンもブロッコリーもコーンもちゃんと食べてあげるけど、トマトだけは箸でつつきもしない。

ふん。僕の脳みそにほこりがちらりと見えた。そして元気なアタマのいいが飛び出た。

裸足で逃げ出してしまった。

そんな僕にアタマのお父さん。

「好き嫌いすると強くなれなー。」

「みさみたかくかべぐ回ー。みさみたかくかべぐ回ー。」

なごでホントに。

「いい。アタマがいい。あんなに赤いのに想像できなー。」

ほことはハバネロみたいに辛いんじゃないの？  
それに、アタマを切ったときの虫身、あのざらついたゼリーみたい

なあわ。

ほことはハバネロみたいに辛いんじゃないの？

いな。

ホントにきもちあるー。  
なあわ。

「うわ、おまえもやつせんでしたっ！」

ぱしゃ、とお箸をおいて僕は食器を台所こもってこべ。

ママは少しだけ悲しそうな顔をしていたけど、でも、『ぱっかりはママが悪いじゃないか。

少しテレビを見て、お風呂に入つて、布団にもぐつこんだ。

「あー、神様。こんなならママをこの世から消してください。」

そんなことをついて、僕、澤田 隼は眠りこついた。

/

「隼ちゃん、朝よ~」

蓑虫みたいに布団に包まつて、太陽のビームから眼を護つてみると、ぐいぐいとママが布団を引っ張つてきた。

「う~ん。」

もつと布団に包まつて、芋虫みたいにうにうに体を揺らしてたら、ずばあんなんて勢い良く布団を吹き飛ばされてしまった。

「うそ、本当に天氣。今日は布団干すぞ~。」

ぱづ職人みたいにママは布団を片手でぐるぐると回し始めた。

ママ、何でママはたまにハンマーをウジロウミみたいにそんな力持ちになるの？

「朝、」はんざわんから顔洗つて着替えてきなさいね。」

「はあー」

僕は顔を洗つてパジャマを脱ぎ捨てて、あつとこつ間に食卓に着いた。

そして、愕然とした。

毎朝の「」飯はトーストのはずなのに、僕のこつもの席に用意されてる「」飯は全部トマト。

お皿にこつも乗つてるのは、ベーコンハッシュのとこりんトマトの輪切り、ポテトサラダのとこりんはブチトマトのと、ウインナーのとこりんは輪切りのトマト（本日一度目）、パセリのとこりんはトマトのヘタ、そして、一番おかしこのが。

ぴー～……カション

飛び出すタイプの、ドザンもん型の焼き色がつぶ血煙のトースターから飛び出したのは本日二度目の正直、こんがり焼けたトマトの輪切り（ドザンもんも涙眼に見えるよ）

「なにやつてんのー！」と、木馬の艦長さんが叫ぶ声が聞こえてきた気がした。

僕の後からやつてきて、一ぱいとコップに牛乳を注いだママ。

そんな異常事態演出中なのに、機嫌に鼻歌を歌つてトースターから熱さうにトーストマートをお皿に乗せて、こともなく僕の前にコトリとお皿をおいた。

111

「はい、 いただきま～すつー・ビーフしたの隼ちゃん? まだ寝ぼけてるの?」

きょとんと僕の顔を覗き込んでくるママを見て、『実録、切れる子供たち!』という三チャンネルでやつてたニュースがフラッシュバックみたいに頭にバーンと浮かんできた。

までまで僕。

冷静さを欠いちゃだめだ。こうなったことの経緯をママに聞いたださなきやならない。

アーニーはなぜかわからせ...?

「マ… おかあさん、お父さんは、この朝はまだを食べてお仕事に行つたの?」

「「」の朝」はなんって、こつもとおんなじじゃない。そういう、幸正さんは一時間くらい前にコレを食べたわよ。どうして？」

僕はママの返事を、テープルにあいをついて突つ伏したまま聞いた。  
ママはどつあつてもこの事実をいつもと同じだって言い張りたいみたい。

そんな馬鹿な。

今までだつてミネストローネを残したり、コソソメ味じゃないときのロールキャベツ残したりしてきたのに（チキンライスは食べたつけそういうえば）なんで今更、昨日プチトマト三個を残したくらいでこんな仕打ちをするんだよ。

それに神様あれだけ熱心に（一度だけだつたけど）昨日の夜にお願いしたじゃないか。なのに何でこんなトマトきませりな朝を迎えるやならないんだ。

憤りの炎を鎮火すべく一気に牛乳を飲み干した。

鼻の下の白髪を男らしく親指ではじくつに拭いて深呼吸。

「ママ……じゃなくておかあさん一僕食欲無いからせつ学校に行くからね。」

「あ、大丈夫？もし体調が悪いならお医者さんに行く？」

「大丈夫！」

ズシンズシンとフローリングを怪獣みたいに踏みしめて、今僕はママの仕打ちに腹を立ててるんですよとアピールしながらランドセルを取りに行く。

昨日宿題があつた算数のノートと教科書をランドセルにぶち込んだ。

今日は金曜日。

でも何か特別な行事があるとかで半日の三時間しかない。

少しでも早く学校に着いて彩華ちゃんの顔を見溜めしようと土曜日曜と、僕は生ける屍になっちゃつ。

「ほりほり、おべんとひ。」

いやいやとランダセルを背負いつなげ、ママは背中でじんじん。

よし、すしと響くこの重さ、お弁当がランダセルにパイルダークンしたことと間違いない。

「こつこつめかひ。」

朝一はんの報復に少しだけ投げ捨てるみつこつてから玄関を飛び出した。

通学班から分かれてすぐに靴を履きかえる。僕はもつ速攻で上履きに履き替えて教室に向けて駆け出した。

/

教室の木目が浮いた引き戸の前で二回深呼吸。

「こりで、教室のドアを開けるなりゼイゼイと息を切らしてなんて最悪。

朝のせめぎあいが今日はどう転ぶか分からなければ、もしものときのために暴れ狂う心臓を落ち着けた。

ガラリ。

上半期一最高にさわやかな笑顔を浮かべてドアを開ける。

教室の真ん中あたり、自分の席とその隣に視線を向けた。

とたん表情は急転直下、さわやかな笑顔は陰気のズンドコまで質を落としてから、平静の笑顔に戻る。

「おはよー、おはよー、うんおはよー」

いつも挨拶をしている友達に朝の挨拶をしながら自分の席へ。隣の席をちら見してもやつぱりまだ彩華ちゃんはきていない。

「はあーー

一度切ないため息を漏らしてからすぐには持ち直して教科書類を引き出しに捨じ込んだ。

一時間目の算数のノートと教科書を机の上に広げておく。

ほんとはホームルームがあるから出すには早すぎるんだけど、彩華ちゃんが来たときに

「あれ？宿題忘れたの？」

「宿題ならもう終わってるんだけどちょっと、予習をね」

わあ、朝早く来て予習なんて隼君入テキ

「お前が帆寄せて私に」も教えてくれぬ？」

「もちろんだよ」

ウフフフフフフ……アドレナリンダダ漏れ注意報発令中。

卷之三

「ねえ！隼君ー、ミダレミダレー！」

はつとなつて顔を左に直角に回すと眉をひそめて少し後ずさりしている彩華ちゃん。

なあああああんだとおおおー！？

ゴホン。

一度咳払いをして親指で男らしく涎を拭いた。

「あ、あははは彩華ちゃんおはよー。」

「う、うん。おはよう隼君。その……大丈夫なの？」

リボンで髪の毛を一つに分けている変則ツインテールの彩華ちゃん。くじくじした綺麗な瞳で見つめられるともう僕の心臓はアイアンメイデンで拘束されたみたいに「ずきゅんずきゅん」とためこみます。

「だいじょぶだいじょぶ。」

「だいじょぶ、じゃないじゃん。宿題忘れてきたんでしょう。」

彩華ちゃんの視線は鋭く僕の前の閉じられたノートに突き刺さる。

「ああ、ノレは違…」

「しようがないなあ。見せてあげるから汚さないでよね。エダレとかで。」

ピンク色のラングセルから可愛い口元濡れのピンクグマがプリントされたノートを取り出して、彩華ちゃんは僕の前に。

「え、あ、うん。ありがと。宿題忘れてどうしたかと思つてたんだ。」

こんなはずじゃなかつたの。」

僕は心の中で情けない自分に、そして彩華ちゃんの優しさに流れる涙の海に浮かびながら、それを受け取つて大事にノートに書き写した。

勉強が終わつてお弁当の時間、向かい合ひに机を動かして僕は机の上にお弁当を取り出した。

正面を見るとバスケットとつむぎおしゃれなお弁当を展開し始めている彩華ちゃん。

空ける前からその中身がハイセンスであることはうかがい知れるといつもの。

でも僕のお弁当箱も捨てたもんじゃない。

包んでいる袋を広げるとお弁当箱の蓋にはスーパー合金武者・成金丸が勇ましく刀を振り上げている。

一つ深呼吸。

「じゃあ、彩華ちゃん。」

「うん。セーのっ」

「うん。僕のお弁当が煮物ばかりの地味なお弁当だつたら赤つ恥。」

彩華ちゃんの掛け声と共にこっしゃりお弁当の蓋を開け放つた。

「.....」

「サンデイッシューって、ビリした隼君?」

「あ、うん。」

お弁当箱の中は煮物ばかりの茶色弁当じゃなくて、いつもと鮮やかな色だった。

鮮やかな、赤色弁当。

もはや当然といつ勢いで赤はすべでアマト。

『飯の位置にはサイドロみたいにカットをされた細かいトマト、真ん中のカリカリ梅のポジションにはプチトマト。

おかげでその他すべてが丸みを帯びた形のトマト。

まつ毛待だよコレは。

潤む涙腺を無理やり締め上げる。

弁当の内容なんかでないでいる軟弱ものだなんて綾香ちゃんに思われたくないから。

そして、彩華ちゃんに見られないようにお弁当の蓋を開じようとしたとき。

「隼翔、どうしたの？お弁当食べないの？嫌いなものだつたとか？」

僕の様子に気付いたみたいで綾香ちゃんはお弁当を覗き込んだ。

「いやいやいや、ちがうんだよ彩華ちゃん。僕に嫌いなタベモノなんてあるわけないじゃん。ただ、僕あんまりおなかが減つてな……」

くう～？

最悪のタイミングで疑問形のおなかの虫の雄叫び。

「もじすめ『食べないの？』ってところへ少し静かにしてるよバカー！」

「おなかなってるよ？」

「あ、あははは。なんだね。」

「もしかしてダイヒツトとか言つのか？」と軽いよされ。

少し上田遣いで苦笑する彩華ちゃん。

ちくしょおおそうだよつて一瞬言こなつちやつたよ。

「ん～。彩華ちゃんが美味しそうに食べてるのしたら急におなか減っちゃつたんだよ。じゃあ、食べよっか。」

「なんだ～？」

いつもみたいに悪戯っぽく笑ってくれた後、ぱくっと赤いものを手に持つて口に放り込む彩華ちゃん。

ん？

「これ」と皿をこすつてみた。

そして、やつぱり相変わらず見えたのは綾香ちゃんが輪切りのトマトを持て持つて口に運んでいる様子。

おかしい。

視線を落としてみた。

やつぱり、バスケットに詰まつてこむのはすべてトマトオノニー。

やつぱり、彩華ちゃんは『サンデーベイシチ』つてこつてたの。

「ね、ねえ。そのサンデーベイシチを…

「ん？ サンデイチがどうかした？ 食べたいなり一個あるよ～」

でも、おかずもひつね。

なんて、弾むようなキャラんとした可愛いくて、彩華ちゃんはトマトを差し出す、代わりに僕のお弁当から一つトマトを持っていた。

「ん~、隼君のママお料理上手だよねえ。私今度弟子入りしようか  
しら。このから揚げなんか最高だよ~。」

「そ、そう?でも、彩華ちゃんのおかあさんも……」

そこまで言つて、渡されたサンデイツチ(だと綾香ちゃんが叫びついたマト)に視線を落とした。

好きな子が手渡してくれたお弁当を、たじろトマトとはしゃべ、まだ小学生とはいえ男の僕が食べらいでか~!~

生睡を飲み込んで深呼吸してから、僕は勢い良く半分一気にかじりついた。

「ん~つ~!~

涙がこぼれないように上を向いてガシガシ噛み碎いて、一気に飲み込んで。

「え?」

サンドイッチの味がするこのトマトは、本当に、美味しかった。

「『私のお母さんだが、え?』な腕前ついて」と~。

ふうと口を膨らませる彩華ちゃん。

可愛いナビにつけマズイ。

あ、サンドイッチがじゃなくて。

「ち、違つよ彩華ちゃん。サンデイッチの枠を飛び越えるへりこ美味しくてびっくりしたんだ。」

信じられない！

手元にある 残り半分のエーハイドを貯めていた そして 残りを一気に 口に放り込む。

ほりそれはサンディーのチーズ味だった。

「うそ、ホントないしい。ありがとね彩華ちゃん。」

「え、えへへ。ホントはこのサンドイッチ私が作つたんだよ~」

「きっと、彩華ちゃんは将来いいお嫁さんになれるね。」

僕の言葉に、はにかむように頬を染めて、にこりと彩華ちゃんは微笑んだ。

僕も照れくさくなつて、自分のお弁当に手を付けた。全部トマトだつたけど、確かにどれも違う味。

ご飯の味だつたり、カリカリ梅の味だつたり、から揚げだつたり。

一つだけ、甘酸っぱいような知らない味があったけど、それもおいしかった。

もしかして、昨日の夜に神様にお願いしたから、神様が嫌いなトマトがなんだか分からぬように僕の願いをかなえてくれたのかもしれない。

そう思つたら、うれしくなつた。

途中喉にトマト（ほうれん草と「ーン」のバター炒め味）を詰まらせた僕に、しうがなないなあつて彩華ちゃんがお茶を分けてくれたからもう僕は夢見心地でお弁当を食べ終えたんだ。

「ねえ、今度の日曜日こ、隼君の家に遊びにいつていい？あの、そ の…ほら、隼君のお母さんに料理教えてもらいたいし、ね。」

帰り際にもじもじしながら、彩華ちゃんが僕にそういってきたときには、死んじやつてもいいくて思つたくらい。

「うん！大歓迎！」

そんなやり取りをして僕はスキップしながら帰つたんだ。

「たつだいま～！」

勢い良く玄関を開いて家に駆け込んだ。

ママはそんな僕の様子を見て、

「よかつた。元気になつたみたいね。お帰りなさい。」  
つて笑つてた。

すぐには空になつた弁当箱を手渡して、今日の出来事を報告。

日曜日に綾香ちゃんが来るんだよっていつたら、よかつたわね。  
じゃあ、とつておきの料理を彩華ちゃんに伝授しちゃうわよ。  
つてママもつれしそうだった。

僕は部屋にランドセルを駆け足で置いてきて、すぐにまた降りてきた。

そろそろ、スーパー合金・成金丸の再放送がやるんだ。

冷蔵庫からジユースを取り出してコップに汲んで、テレビまで早足で戻る。

特等席に座布団を一枚敷いて座つた。  
うん、座り心地は悪くない。

— 1 —

オープニングの音楽が流れ始める。

わくわく胸を躍らせて眼を見開いていると、

「ひさんちゅうせいかじゅくあ？」

もう！今歌が一番熱いところなんだから後でにしてお

「お弁当の中のピクチャードちやんと食べたの〜?えりこじやない。」

- 7 -

「え？」

ママに振り向いた僕の後ろではサビに突入した『唸れ札束・救え大貧民』が流れてる。

「ね、言つたでしょ？ プチトマトって甘いからせつと食べれば美味しいよつて。」

「そういえば、一個だけ味が分からぬトマトがあつたつけ。あれつて、ホントアマのアントマトだったの？」

「うさ、ホントに美味しかったよ。」

その日の夕飯もトマトばかりに見えた。でも、どれも美味しかったし、それはそれで面白かった。

僕は神様ありがとうつてもう一度寝る前に心の中でお礼を言つておいたんだ。

／土曜日

テレビに映る料理番組ですべてアマテアベニアが見えたやつだった。

でも、今僕はアマテアが大好きだから嫌じやない。

なあがああああい一日を終わらせて、やつと田口は綾香ちゃんが来てることになつてゐる日曜日。

朝一番に一番お気に入りの服を着て、僕は家の前で待つてることしおつて心に決めた。

／日曜日

約束は午後一時。

僕は昨日吟味した服を着て、後で出来上がるご飯を楽しみに朝ごはんとお風呂を食べないで、玄関に行つたり戻つてきたりを繰り返していた。

午後一時になつてから駿河線の電動車を乗つて回すフコをしながら、  
関先ですかつとまつてゐる。

時間は、午後一時五十分。

丘を駆け上がつてゐる影が見えた。

「彩華ちゃんー?」

声を張り上げて一歩踏み出しかけたけど、その足は急に止まった。  
田の前に丘を登つて転がつてきたのは、今まで見たこともないくらい  
このおつきなトマトだった。

「ねえ」と転がつて、僕の田の前で、そのトマト止まつた。

真つ赤で、つやつやしてて、みずみずしいつだ。

あつと、彩華ちゃんがトマトになつた丘へひこ綺麗なんじかな  
いかな、なんて想つてひこだつた。

『えへへ。少し遅くなつちやつたかな。』

「早く、来ないかな。綾香ちゃん。」

「そういえば、こんなに大きなトマトだと、どんな味がするんだ？」

「いい加減おなかがすいていた僕は、ちょっとだけ自分を甘やかすことにして。

パクリ。

そのままトマトにかじりついた。

「美味しいッ！－なんだろコレ！？」

「僕は、歯止めが利かなくなつておなかが一杯になるまでそのままトマトを食べた。

それでも、おつきあがけのトマトは半分以上のこいつてる。

びしょびしょになつた口の周りのトマトの汁を、親指で男らしくぴんと拭つて。

「これじゃあ、綾香ちゃんどこで遊びなんかおなか減らないんじやないかな。

なんて心配した。

時間は午後一時五分。

「おそいなあ。彩華ちゃん。」

僕は、横のトマトをよそに、元のトマトをじっと見つめ続けた。

THE END

(後書き)

実はホラーでした。

いろいろとありますが、がつかりをせてしまい申し訳ありません。  
そういう、話を書きたかったのです。

これであなたの中に、なにか、たとえ怒りやむなしさであつても湧  
いたなら……

この作品はマザーテレサが『』の対極である、『』  
『』ではないということですね。

次回はもっと救いのある話。はー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5385b/>

---

嫌いなタベモノ

2010年12月14日15時38分発行